

## レジリエンスとの関連から見た大学生の進路決定

藤 田 尚 宏

(追手門学院大学)

### The effects of resilience of university students on their career decision making

Naohiro Fujita

(Otemon Gakuin University)

#### 問題と目的

##### 1. 大学生の進路選択の現状とその背景

「大学生にとって、卒業後の進路を決定することは自分の人生を方向付ける大きなライフイベントのひとつである」(神近, 2013) というように大学生の進路選択・決定は個人の一生涯において大きな意味を持つ。Erikson (1959) が青年期の発達課題として、職業に関する同一性(職業的同一性)の獲得を挙げていることや、Super (1990) が、探索期の発達課題として、さまざまな分野の仕事やその必要要件を知り、特定の仕事を絞り込んでいくことを取り上げているように、発達の視点からみて進路選択・決定は重要な課題である。

しかし、近年の大学生では、進路の決定ができない、もしくは決定を先延ばしにするといった問題を抱えた者が少なくない。労働政策研究・研修機構(2006)の「大学生の就職・募集採用活動等実態調査結果Ⅱ」によると、卒業後の進路が未定な大学生は「やりたいことがわからないから動けない」「具体的に何をすればいいかわからない」「様々な進路の方向性で悩む」と回答をしており、大学生の進路選択・決定の困難さが指摘されている。また文部科学省の2015年度学校基本調査によると、2015年に大学(学部)卒業後の状況として、大学卒業者(約56万人)のうち一時的な仕事について者と進学も就職もしていない者の割合が合わせて12.4%であることが報告されており、これは約5万人もの卒業生に相当

することが示されている。

このような問題の背景としては、大きく2つの要因があると考えられる。1つは雇用情勢の変化である。2008年の金融危機をきっかけに世界的な景気後退に陥り、それに伴って雇用情勢も悪化し、総務省労働力調査(2015)では、役員を除く雇用者全体の5328万人のうち、正規雇用者3331万人に対して非正規雇用者は1997万人で、全体の37.5%を占めるといふ雇用の不安定化が示されている。

もう1つはキャリアに対する意識の問題である。進路を決めきれずに悩む大学生がいることはすでに指摘されている(労働政策研究・研修機構, 2006)。また安達(2004)は、適職信仰・受け身・やりたいこと志向の3つが現代の若者のキャリアに対する意識だと述べており、そのうちきっと何か自分にぴったりの仕事に巡り合うだろう、天職に巡り合うはずだ、将来に夢や希望を抱きながら適職との出会いを待ち続ける、将来なんてどうにかなる、あれこれ考えても仕方ない、その時に考えればよい、好きなことや自分のやりたいことを仕事に結び付けて考える傾向などを指摘している。実際に大学生向けのアルバイト求人・進路・就職情報サイトを見ると「やりたい仕事を見つける」「あなたに合った仕事を探す」「あなたの天職が見つかる」というような文言を多く見かけるが、これは近年の大学生のキャリアに対する意識の反映であると思われる。

##### 2. 進路の選択・決定の困難と進路不決断

安達(2004)の研究では若者のキャリアに対する

意識の1つ「受け身」が、職業不決断につながることを示唆した。富永（2008）は自分が置かれた状況下で、多くの可能性の中から一つの選択肢を選び、それに適応していく行動のことを進路選択行動としている。そのような進路選択行動ができない、つまり進路を決められないなどの心理的な面での困難さの状態を示す用語として、「進路未決定」と「進路不決断」の2つがよく使われる。安達（2004）によると「進路未決定」は「何らかの理由で職業を選べない、選ばうとしない状態」とされ、清水（1989）は、「進路不決断」は「将来の進路を決めることができない心理状態」としている。このような進路の意思決定の困難さを示す問題については不決断と自己効力感の関連をみた研究が浦上（1983）によってなされているほか、廣瀬（1998）が進路選択過程に対する自己効力が進路不決断と強い関連があると、進路に関する自己効力感の研究の展望において説明している。

進路選択に関する自己効力感の研究は「進路選択に対する自己効力」「進路選択過程に対する自己効力」「進路適応に対する自己効力」の3つに分類することができるが、富安（1997）は進路決定に関する自己効力感（進路決定効力感）について、青年期の進路決定においても、進路決定という成果を生み出すための行動をどの程度実行できるかどうかの確信度、すなわち進路決定効力感が進路決定の重要な要因であるとして注目されていると述べている。このように進路の決定には自己効力感が大きな影響を与えていることがわかる。

### 3. キャリア形成支援とレジリエンス

また大学生の進路不決断の問題は、井本・青木・長谷川・中谷（2012）によれば、大学のキャリア・センターや就職支援課などの進路支援の場で相談内容の多様化という形で表れており、自己理解・現実検討力の低い学生や意欲のない学生が精神的な落ち込みを見せ、中には抑うつ傾向を見せる学生も増加傾向にあると指摘している。その一方で、ベネッセ教育総合研究所（2012）の「第2回大学生の学習・生活実態調査報告書」によると「4年生の進路支援の活用状況」において、「よく活用している」「たまに活用している」と回答した者の割合は「大学での進路、就職相談」については37.4%、「大学での単位の出ないキャリア形成支援（就職支援講座・セミナー・ガイダンスなど）」については41.3%であったと報告している。これは、半数以上の学生は、大学

等が提供する就職支援の機会を活用していないことを示している。

近年の大学生における就職活動は、熾烈な選抜競争の中で行われていることから、就職活動の過程での失敗や困難のほか、不採用経験による否定的な影響を受けようとも、就職内定の獲得のためには就職活動を継続する必要がある。言い換えれば、就職活動という困難な状況の中では、自らにとって否定的な事態に遭遇しても、うまく適応する能力や態度が求められる（軽部・佐藤・杉江、2014）。

このような困難にもかかわらずうまく適応して乗り越えられる自助資源として、レジリエンスという心理的特性がある（本多・赤沢、2014）。Grotberg（2003）によると、レジリエンスとは困難な出来事を克服し、その経験を自己の成長の糧として受け入れる状態に導く特性と定義され、レジリエンスを個人の潜在的な回復力として注目し、この弾力性のある特性は誰もが備えているという。また、レジリエンスは「ストレッサーを経験しても心理的な健康状態を維持する、あるいは一時的に不適応状態に陥ったとしても、それを乗り越え健康的な状態へ回復していく力や過程である」（齊藤・岡安、2010）、「逆境にさらされたり、ストレスフルなできごとによって精神的な傷つきをうけても、そこから立ち直り、適応していくことができる個人の特性のことである」（平野、2012）と説明されているように、ストレスに対する耐性をも意味している。さらに米国心理学会は、「現実的な計画を立て、成し遂げていく力」「自分を肯定的に捉えて自分の能力を信頼できる力」「コミュニケーション能力と問題解決能力」「強い感情や衝動をマネジメントできる力の4要素」をあげている（American Psychological Association, 2008）。

また、平野（2010）はレジリエンスを「ソーシャルスキル」「コンピテンス」「自己統制」「チャレンジ」「好ましい気質」「肯定的な未来志向」「その他」の7つに分類し、多様なレジリエンス要因を、「資質的レジリエンス要因」と「獲得的レジリエンス要因」に分け、測定する「二次元レジリエンス要因尺度（BRS）」を開発している。坂柳（2016）は「変化する社会の中で困難な状況にあっても、それを乗り越えて、自分なりのキャリアを創造していく力」と定義して、「キャリアレジリエンス」尺度を開発している。さらに児玉（2015）は、キャリアレジリエンスという概念を「キャリア形成を脅かすリスクに直面したとき、それに対処してキャリア形成を促す働きをする心理的特性」として、その測定尺度

を開発し、職業的アイデンティティおよびキャリア成熟度などとの関連を検討している。

このように、大学生の進路や職業の選択・決定における困難は、進路や職業の不決断という概念で捉えられ、進路選択やその過程およびその結果としての進路適応に関する自己効力感が、進路不決断を抑制するということが示唆されてきた。その一方で、大学生の進路や職業の選択・決定の過程における失敗や困難、不安や抑うつ、ストレスや挫折感の影響を受けながら、就職活動などの進路選択に必要な活動を継続し、困難な事態にうまく適応して乗り越えていく心理的特性としてレジリエンスに注目した研究が行われるようになってきている。本研究では、大学生のレジリエンスが進路不決断を抑制する効果があるのかどうかを検討することを中心に、これまで進路不決断を抑制する要因としてみなされてきた自己効力感について、「職業に就いた後にうまくやっていく自信がある」などの「進路適応に関する効力感」、すなわち「就業効力感」を指標としてその関連を検討したい。

## 方 法

### 1. 調査対象者と調査方法

2015年11月下旬から12月初旬にかけて、近畿圏内の4年制大学に在籍する大学生を対象に質問紙調査を実施した。回収した232名のうち、回答に不備のあった22名を分析から排除し、有効回答件数は1年生36名、2年生44名、3年生23名、4年生107名の計210名（平均年齢=20.7歳、SD=1.39）であった。そのうち男性72名（平均年齢=20.64歳、SD=1.36）、女性138名（平均年齢=20.78歳、SD=1.41）を分析の対象とした。また調査対象者の中で、就職を考えている者は157名、進学を考えている者は46名、その他が7名であった。そして卒業後の進路が確定した者は82名、進路が未確定の者が107名、その他が21名であった。

### 2. 質問紙の構成

質問紙はフェイスシート（性別、年齢、学部、学年）と、現在の進路と進路の決定状況、就業効力感尺度（古市, 2012）、大学生用レジリエンス尺度（斎藤・岡安, 2010）、進路不決断尺度（清水, 1990）で構成された。具体的な内容は以下の通りであった。

### 2-1. 進路決定状況

対象者の進路決定状況を確認するために、2つの質問に回答させた。質問は、「今のあなたの進路状況に近いものをお答えください」とし、回答は単一回答方式で3件法（質問1では①就職、②進学、③その他、質問2では①確定した、②継続中である、③その他）とした。

### 2-2. 就業効力感尺度

就業効力感尺度とは、古市（2012）によって作成された実際の就業場面で直面する、職務内容、職場の人間関係、職務上の問題への対処、転職・離職などのさまざまな課題にかかわる自己効力感を測定する尺度である。同研究で大学生対象に進路決定効力感尺度との間に有意な関連がみられ、高い信頼性を示したことから、今回の研究に用いることとした。回答は、「あてはまらない（1）」から「あてはまる（5）」までの5段階で求め、得点が高いほど就業効力感の傾向が高くなるように得点化した。

### 2-3. 大学生用レジリエンス尺度

大学生用レジリエンス尺度とは、斎藤・岡安（2010）によって作成された、大学生を対象としての心的外傷体験に対応できるレジリエンスの傾向を測定する尺度であり、5つの下位尺度（25項目）からなる。回答は、「全くあてはまらない（1）」から「とてもよくあてはまる（4）」までの4段階で求め、得点が高いほどレジリエンスの傾向が高くなるように得点化した。

### 2-4. 進路不決断尺度

進路不決断尺度はどのような原因で不決断が生じているかを測定する尺度である。清水（1990）によって作成されたこの尺度は、「進学先」の決定、「将来の職業」の決定の2つの側面について8つの下位尺度から構成されており、合計40項目からなる尺度である。またこの尺度は中学生を対象として作成された尺度であるが、奥井・大里（2004）によって、本尺度の若年労働者への適応が可能であることがすでに検証されており、さらに萩原・桜井（2008）が大学生に適用した研究を実施している。以上を踏まえ、本研究においても進路不決断尺度を大学生に対して適用することにした。回答は、「あてはまらない（1）」から「あてはまる（5）」までの5段階で求め、得点が高いほど進路不決断の傾向が高くなるように得点化した。

## 結果と考察

### 1. 各尺度の因子分析の結果と検討

#### 1-1. 大学生用レジリエンス尺度の因子分析

大学生用レジリエンス尺度の25項目に対して主因子法による因子分析を行った結果、4因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度4因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。各因子への負荷量の低い ( $\alpha = 0.35$ 以下) 5項目を分析から除外し、再度、主因子法・Promax回転によ

る因子分析を行った。Promax回転後の因子パターン行列をTable 1に示す。第1因子は「私の人生に良い影響を与えてくれた人がいる」「今までの人生で私にとって重要な人と出会ったと思う」、第2因子では「私に元気がない時は、気づいて励ましてくれる人がいる」「何か困ったことがあったら相談できる人、あるいは場所がある」、第3因子は「何事も悪いことばかりでないと楽観的に考える」「いつも物事の明るい面を見ようとする」、第4因子は「どんな困難な場面であっても、私は諦めない」「何があっても自分のベストを尽くす」という項目に高い負荷量を示した。

Table 1 大学生用レジリエンス尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

項目内容	因子				
	1	2	3	4	
<b>1. 重要な他者 (<math>\alpha</math> 係数 = .81)</b>					
私の人生に良い影響を与えてくれた人がいる。	.82	-.02	.11	-.16	
今までの人生で、私にとって重要な人と出会ったと思う。	.71	.02	-.09	.05	
大切だと思える人がいる。	.67	.11	-.10	.16	
いろいろなことを周りの人と話すことが好きだ。	.49	.18	.06	.08	
愚痴を言い合える人がいる。	.40	.37	-.03	-.08	
<b>2. ソーシャルサポート (<math>\alpha</math> 係数 = .86)</b>					
私に元気がないときは、気づいて励ましてくれる人がいる。	.12	.81	-.05	-.08	
辛い時には、誰かに話を聞いてもらうことが多い。	-.05	.80	-.09	.03	
何か困ったことがあったら相談できる人、あるいは場所がある。	.19	.67	.03	.00	
普段から、私の気持ちをよくわかってくれる人がいる。	.07	.65	.12	.08	
<b>3. 楽観的思考 (<math>\alpha</math> 係数 = .75)</b>					
何事も悪いことばかりではないと楽観的に考える。	.06	-.07	.78	-.06	
いつも物事の明るい面を見ようとする。	.13	-.05	.73	.00	
どうにもならないことに関しては、あれこれと考えない。	-.14	.08	.58	-.19	
結果がどうなるかわかりない時は、いつも1番いい面を考える。	-.13	.05	.52	.03	
嫌なことがあっても笑い飛ばせる。	.22	-.21	.52	.18	
<b>4. コンピテンス (<math>\alpha</math> 係数 = .71)</b>					
どんなに困難な場面であっても、私は諦めない。	.02	-.20	-.16	.82	
何があっても自分のベストを尽くす。	.24	-.13	-.07	.58	
私には、自分の目標を達成する力があると思う。	-.05	.24	.07	.47	
努力すれば立派な人間になれると思う。	-.13	.20	.17	.47	
努力すれば、どんなことでも自分の力でできると思う。	-.23	.21	.21	.41	
努力することと幸福になることは、あまり関係ないと思う。	-.04	-.12	.10	-.35	
<b>削除項目</b>					
友達が多いほうだ。					
これまでの学校生活は、充実していた。					
たとえば嫌なことがあっても、今の経験は将来のためになるはずだと思うことが多い。					
人と話すことは苦にならない。					
自分が厳しいときであっても、人に助けを求めることはしたくない。					
	因子間相関	1	2	3	4
	1	—	.48	.39	.24
	2		—	.47	.39
	3			—	.41
	4				—

Table 2 就業効力感尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

質問項目 <sup>1)</sup>	$\alpha$ <sup>2)</sup>	$r$ <sup>3)</sup>
将来、就職したとき、		
職場の同僚とうまくやっていく自信がある。	.86	.72
自分の仕事をうまくこなしていく自信がある。	.86	.71
いろいろな困難や問題に直面しても、何とかうまく対応していく自信がある。	.87	.67
職場の上司とうまくやっていく自信がある。	.87	.66
仕事の内容がいろいろ変わったとしても、その都度学びなおして、うまく適応していく自信がある。	.86	.72
何らかの理由で転職したとしても、その後、何とかうまくやっていく自信がある。	.86	.72

1) すべての項目の冒頭に、「将来、就職したとき」という文言がある。

2) 当該項目を削除した場合の  $\alpha$  係数 (6項目での  $\alpha = .89$ )

3) 項目一尺度得点間相関

齊藤ら（2010）の先行研究に近い形で因子構造が確認されたため、第1因子を「重要な他者」、第2因子を「ソーシャルサポート」、第3因子を「楽観的思考」、第4因子を「コンピテンス」とした。内の一貫性（ $\alpha$ 係数）を検討したところ、「重要な他者」で $\alpha = .81$ 、「ソーシャルサポート」で $\alpha = .86$ 、「楽観的思考」で $\alpha = .75$ 、「コンピテンス」で $\alpha = .71$ と十分な値が得られた。

### 1-2. 就業効力感尺度の信頼性

就業効力感尺度6項目の $\alpha$ 係数を求めたところ $\alpha = .89$ と高い内の一貫性を示した。具体的な質問項目および項目分析の結果をTable 2に記載した。

### 1-3. 進路不決断尺度の検討

進路不決断尺度の40項目に対して主因子法による因子分析を行った結果、5因子構造が妥当であると考えられた。そこで5因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った結果、十分な因子負荷量を示さなかった6項目を分析から除外し、再度、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の因子パターンをTable 3に示す。

第1因子は13項目で構成されており、「自分のことについても、進学先（職業）のことについても、よくわからないので、進学先（将来の職業）が決まらない」「自分の興味や関心がよくわからないので進学先（将来の職業）が決まらない」など、自分の将来への理解の低さが見られたため「不十分な自己理解」と命名した。第2因子は6項目で構成されており、「進学（職業選択）の問題は重要なことなので、誰かと相談したい」「進学先を決めるために（将来の職業について）、誰かと相談や話し合いをしたい」など、進路の決定を他者との相談で決めようとする傾向が見られたので「他者依存」と命名した。第3因子は7項目で構成されており、「進学の希望はあるが、入学試験が心配である（具体的な将来の職業を考えているが、採用試験が心配である）」「（将来の職業についての）希望は明確なのだが、入学試験（採用試験）に自信がない」など、将来の見通しに不安を感じる傾向が見られたため「見通し不安」と命名した。第4因子は4項目で構成されており、「進学（職業）のことなど考えずに、自分の好きなことに集中したい」「進学などせずに（将来、職業につかずに）、好きなことをしたい」など、進路選択よりも自らの楽しさを優先することや進路決定には努力・才能は関係なく別の要因で決まるなどの内容の項目が

高い負荷量を示していたため、「努力回避」と命名した。第5因子は4項目で構成されており、「魅力ある進学先（職業）がいくつもあるので、進学先（将来の職業）を決められない」「可能性のある進学先（職業）がいくつもあるので、どれにしたらよいかかわからない」など、多くの進路の選択肢で迷うこと、人との差を気にするため決断しきれないといった内容の項目が高い負荷量を示していたため、「優柔不断」と命名した。内の一貫性を検討するために各因子の $\alpha$ 係数を算出したところ、「不十分な自己理解」で $\alpha = .94$ 、「他者依存」で $\alpha = .81$ 、「見通し不安」で $\alpha = .80$ 、「努力回避」で $\alpha = .73$ 、「優柔不断」で $\alpha = .78$ と高く、十分な値が得られた。

## 2. 各下位尺度の相関分析

### 2-1. 大学生用レジリエンス尺度の内部相関

大学生用レジリエンス尺度の内部相関を見るためにピアソンの相関係数を算出した（Table 4）。その結果、すべての下位尺度間において1%水準で有意な正の相関を示した。これは下位尺度が相互に関連しあっていることを意味している。

### 2-2. 大学生用レジリエンス尺度と進路不決断尺度の相関

大学生用レジリエンス尺度と進路不決断尺度の下位尺度との関連性を見るためにピアソンの相関係数を算出した（Table 5）。

まず、レジリエンス尺度の「重要な他者」「ソーシャルサポート」「楽観的思考」「コンピテンス」が進路不決断尺度の「不十分な自己理解」との間に1%水準で有意な負の相関を示した。この結果からみると、レジリエンスによって不十分な自己理解から生じる進路不決断状況が抑制されると考えられる。また、レジリエンス尺度の「楽観的思考」は、進路不決断尺度の「見通し不安」との間に1%水準で有意な負の相関を示しており、「楽観的に考える」「嫌なことを笑い飛ばす」などの項目に代表される「楽観的思考」が高くなるほど、進路の見通しに対する不安が抑制されるものと考えられる。さらにレジリエンス尺度の「コンピテンス」と進路不決断尺度の「努力回避」の間に5%水準で有意な負の相関を示しており、「決して諦めない」「努力すると立派な人になれる」などの項目に代表される「コンピテンス」が高くなるほど、努力することを避けようとする傾向が抑制されると考えられる。

以上の結果からみると、レジリエンスは特に進路

Table 3 進路不決断尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

項目内容	因子				
	1	2	3	4	5
<b>1. 不十分な自己理解 (<math>\alpha</math> 係数 = 0.94)</b>					
自分のことについても、進学先(職業)のことについても、よくわからないので、進学先(将来の職業)が決まらない。	.96	.04	-.11	.00	-.09
自分の興味や関心がよくわからないので進学先(将来の職業)が決まらない。	.87	-.04	-.20	.11	.01
自分の能力や適性がよくわからないので進学先(将来の職業)が決まらない。	.84	-.04	.09	-.22	.08
進路先を決めるために必要な具体的な情報がないので進学先(将来の職業)が決まらない。	.80	-.08	.01	-.07	.09
どのようにして進学先(職業)を決めればよいかわからないので不安である。	.78	.06	.02	-.03	.09
進学(将来の職業)のことを真剣に考えたことがない。	.73	-.03	-.21	.20	-.10
いままであまり進学(職業)のことを真剣に考えたことがない。	.69	-.21	-.17	.22	-.01
進学(就職)した後での学校(職業)生活のようすがよくわからないので、進学先(将来の職業)が決まらない。	.68	.06	-.02	-.03	.09
進学先(将来、職業)を決めることがうまくいかどうか不安である。	.67	-.17	.35	-.21	-.09
いろいろ考えすぎて、自分に合う進学先(職業)が決まらない。	.60	.08	.09	.08	.12
進学先(将来の職業)を決めることがまくぜんとしていて不安である。	.49	.14	.17	.11	.01
将来のことはわからないから、進学先(職業)のことはあまり考えたくない。	.48	-.06	.16	.35	-.08
進学先(就職先)を決めることのむずかしさを見ると不安になる。	.41	.26	.20	.10	.00
<b>2. 他者依存 (<math>\alpha</math> 係数 = 0.81)</b>					
進学(職業選択)の問題は重要なことなので、誰かと相談したい。	-.09	.90	.02	-.10	-.09
進学先を決めるために(将来の職業について)、誰かと相談や話し合いをしたい。	-.14	.77	-.02	-.07	.07
今までも重大な問題は親などと相談してきたので、進学(職業選択)の問題でも相談したい。	-.14	.62	.02	-.03	.01
自分一人では何かを決めた経験が少ないので、進学(将来の職業)について誰かと相談したい。	.08	.56	.01	.03	.12
自分だけでは、進学先(職業)は決定できない。	.30	.55	-.08	-.05	-.09
進学先(就職先)の決定は自分一人の力でどうしようもない。	.31	.45	-.07	.07	-.06
<b>3. 見通し不安 (<math>\alpha</math> 係数 = 0.80)</b>					
進学の希望はあるが、入学試験が心配である。(具体的な将来の職業を考えているが、採用試験が心配である)	-.05	-.10	.81	.00	-.03
(将来の職業についての)希望は明確なのだが、入学試験(採用試験)に自信がない。	-.24	.00	.66	.09	.08
希望する進学先(職業)において十分に活躍できるかどうか不安である。	-.10	.27	.51	.13	-.05
思わぬことで希望する進学先(入学(職業)につくこと)ができないかもしれないと不安である。	.33	.05	.49	-.10	-.10
進学(職業選択)のための準備が十分であったかどうか不安である。	.06	.16	.49	.21	.01
何かの影響で希望する進学先(入学(職業)につくこと)ができなくなるのではないかと心配になる。	.20	.05	.46	-.12	.07
希望する進学先(職業)はあるが、これが最良なのかどうか不安である。	-.12	-.15	.46	.07	.24
<b>4. 努力回避 (<math>\alpha</math> 係数 = 0.73)</b>					
進学(職業)のことなど考えずに、自分の好きなことに集中していたい。	.08	-.16	.19	.74	-.10
進学などせずに(将来、職業につかず)に、好きなことをしていたい。	-.05	-.13	.19	.74	.00
進学(将来の職業)のために積極的に努力するよりは、チャンスを待つ方がよい。	.07	.05	-.23	.46	.21
自分の努力や能力よりも、他からの影響で進学先(職業)が決まることが多い。	.13	.23	-.06	.42	.05
<b>5. 優柔不断 (<math>\alpha</math> 係数 = 0.78)</b>					
魅力ある進学先(職業)がいくつもあるので、進学先(将来の職業)を決められない。	.03	.03	.10	-.08	.77
可能性のある進学先(職業)がいくつもあるので、どれにしたらよいかわからない。	-.09	.00	.06	.05	.75
いろいろなことに興味があるので、どこを進学先にしたら(どの職業を選んだら)よいかわからない。	.29	-.16	.03	.00	.58
進学先(将来の職業)について、友達と意見が違うのではないかと心配である。	.06	.21	-.05	.12	.43
<b>削除項目</b>					
希望する進学先(将来の職業)について希望はあるが、それに親が反対するのではないかと心配である。					
進学先(就職先)の決定は、運や偶然によって決まることが多い。					
社会の変化や景気の変動が、希望する進学先(職業)に大きな影響を与えるのではないかと不安である。					
他の人の意見がいろいろあるので、自分に合う進学先(職業)を決めることができない。					
進学先(将来の職業)を決めることに対して不安がある。					
自分に合う進学先(職業)を教えてくれるような検査を受けたい。					

因子間相関	1	2	3	4	5
1	—	.51	.52	.55	.48
2		—	.43	.25	.42
3			—	.38	.30
4				—	.22
5					—

Table 4 大学生用レジリエンス尺度の内部相関

	重要な他者	ソーシャルサポート	楽観的思考	コンピテンス
重要な他者	—	.572**	.346**	.255**
ソーシャルサポート		—	.365**	.346**
楽観的思考			—	.302**
コンピテンス				—

\*\*p<.01

Table 5 大学生用レジリエンス尺度と進路不決断尺度の相関

	不十分な自己理解	他者依存	見通し不安	努力回避	優柔不断
重要な他者	-.224**	-.050	-.030	-.100	-.105
ソーシャルサポート	-.181**	.065	-.069	-.063	-.078
楽観的思考	-.206**	-.075	-.137*	-.038	.118
コンピテンス	-.225**	.028	-.134	-.327**	-.017

\*\*p<.01 \*p<.05

Table 6 大学生用レジリエンス尺度と就業効力感尺度との相関

	就業効力感
重要な他者	.406**
ソーシャルサポート	.398**
楽観的思考	.421**
コンピテンス	.420**

\*\*p<.01

不決断の「不十分な自己理解」という状態を抑制すると考えられる。中央教育審議会答申（2011）において育むべき力とされている基礎的・汎用的能力の中にも自己理解という要素が入っている。このことから、いくつかの段階を踏んで形成していくキャリアの過程から見れば、自らの視野を広げ、進路を具体化していくために必要な自己理解という最初のステップを踏み出せないという状況を抑制するレジリエンスは重要な要因であると考えられる。

### 2-3. 大学生用レジリエンス尺度と就業効力感尺度との相関分析

大学生用レジリエンス尺度と就業効力感尺度の下位尺度との関連性を見るためにピアソンの相関係数を算出した（Table 6）。その結果、レジリエンス尺度と就業効力感の「重要な他者」「ソーシャルサポート」「楽観的思考」「コンピテンス」との間には1%水準で有意な正の相関が認められた。このことから、レジリエンスが就業効力感を促進するものと考えられる。また、下村（2008）が「従来、心理学的な視点からのキャリア教育・キャリアガイダンス研究では、（中略）おおむね進路意識がポジティブである者は、本人の自己概念（自己評価、自尊感情、アイデンティティ、自我の確立）もポジティブであり、そうしたポジティブな自己概念から派生する諸々の個人特性とも正の相関が高いといったことを明らかに

してきた」と述べているように、自己効力感が進路意識に対してポジティブな影響を与えることが分かっている。レジリエンスが就業効力感に与えるポジティブな影響は、進路意識の形成に役立つのではないかと考えられる。

## 総合考察

本研究で、大学生の進路決定について、大学生用レジリエンス尺度を中心に、進路不決断尺度、就業効力感尺度との関連を検討した。

「大学生用レジリエンス尺度」の4下位尺度と、「進路不決断尺度」の5下位尺度と「就業効力感尺度」の相関係数を求めた。大学生用レジリエンスの全ての下位尺度は、進路不決断の「不十分な自己理解」とは有意な負の相関を示し、就業効力感とは有意な正の相関を示した。この結果より、レジリエンスは不十分な自己理解から生じる進路不決断を抑制し、就業場面に対する自己効力感を促進することが示唆された。このことから、不十分な自己理解から生じる進路不決断を抑制し、就業に対する自己効力感を促進するレジリエンスは、進路選択・決定にとって必要な要素だと推察される。

また、本研究では、齊藤・岡安（2010）と同様に、レジリエンスの心理的特性として、「重要な他者」「ソーシャルサポート」「楽観的思考」「コンピテン

ス」の4側面が確認された。そのうちの「重要な他者」「ソーシャルサポート」という特性は、他者との関係なしには成立しない特性であり、自分にとって重要な他者が存在し、その他者から好意や援助を向けられることは、レジリエンスに密接に関連があることが示された。

ところが、キャリアに関するレジリエンスの研究では、個人の能力に焦点をあてて構成された尺度が開発されているが、援助してくれる他者との関係性を含むような項目は含まれていない。しかしHall (2002)が構築したキャリア理論の「関係性アプローチ」では、個人だけでなく、他者との関係性の重要性が強調されている。渡辺(2009)は「関係性アプローチ」について、自律したキャリアを求められ、焦りと不安を感じる日本人に、自分や他者との関係を大事にすることで、その人なりのキャリアを築いていくことの大切さを再確認させてくれる理論だと述べている。以上のようにレジリエンスの概念には、個人の力だけでなく、他者との関係の中で困難に打ち勝ちキャリアを切り開いていくような力を身に着けていくという側面が含まれる必要もあると考えられる。今後は、対人関係の観点を含めたレジリエンス尺度の開発が期待される。

## 謝 辞

本研究は2015年度に追手門学院大学心理学部に提出した卒業論文を加筆・修正したものです。調査にご協力頂いた大学生の皆様、論文作成にあたり多大なるご尽力頂き、最後までご指導くださいました三川俊樹教授に深く感謝を申し上げます。

## 引用文献

- 安達智子(2004). 大学生のキャリア選択—その心理的背景と支援— 日本労働研究雑誌, **49**, 326-336.
- American Psychological Association(2008). *The American Psychological Association: The Road to Resilience on-line* <<http://www.apa.org/helpcenter/road-resilience.aspx>> (2016年9月6日)
- ベネッセ教育総合研究所(2012). 大学生の学習・生活に関する意識・実態をとらえる 大学卒業後の進路 2012年11月上旬  
<[http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku\\_jittai/2012/dai/pdf/data\\_17.pdf](http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/2012/dai/pdf/data_17.pdf)> (2015年12月8日)
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the Life Cycle*. New York: Norton. (エリクソン, E. H. 西平直・中島由恵(監訳)(2011). *アイデンティティとライフサイクル* 誠信書房)
- 古市裕一(2012). 大学生の職業忌避の傾向と自己効力感および就業不安 岡山大学大学院教育学研究科, **151**, 43-50.
- Grotberg, E. H. (2003). *Resilience for today: Gaining strength from adversity*. Praeger Publishers.
- 萩原俊彦・櫻井茂男(2008). “やりたいこと探し”の動機における自己決定性の検討: 進路不決断に及ぼす影響の観点から 教育心理学研究, **56**, 1-13.
- Hall, D. T. (2002). *Careers in and out of organizations*. California: Sage.
- 平野真理(2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み: 一二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の作成 パーソナリティ研究, **19** (2), 94-106.
- 平野真理(2012). 生得性・後天性の観点からみたレジリエンスの展望 東京大学大学院教育学研究科紀要, **52**, 411-417.
- 廣瀬英子(1998). 進路に関する自己効力研究の発展と課題 教育心理学研究, **46**, 343-355.
- 井本恵章・青木敬章・長谷川恭子・中谷桂子(2012). 4年制大学の進路支援における心理学的援助の役割と実践 大阪経大論集, **63**, 149-159.
- 神近裕樹(2013). 大学生の進路決定における充実感と関連要因について 九州大学心理学研究, **14**, 97-106.
- 軽部雄輝・佐藤純・杉江征(2014). 大学生の就職活動維持過程モデルの検討—不採用経験に着目して— 筑波大学心理学研究, **48**, 71-75.
- 児玉真樹子(2015). キャリアレジリエンスの構成概念の検討と測定尺度の開発 広島大学心理学研究, **86**, 150-159.
- 文部科学省(2015). 平成27年度学校基本調査の速報について(報道発表資料) 2015年8月6日  
<[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afieldfile/2015/08/18/1360722\\_01\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2015/08/18/1360722_01_1_1.pdf)> (2015年11月25日)
- 奥井秀樹・大里大助(2004). 若年労働者の職業的不決断の測定 進路指導研究, **22**, 19-24.
- 労働政策研究・研修機構(2006). 大学生の就職・募集採用活動等実態調査結果Ⅱ 2006年3月29日  
<<http://www.jil.go.jp/institute/research/documents/>

- research017.pdf》(2015年11月23日)
- 齊藤和貴・岡安孝弘(2010). 大学生用レジリエンス尺度の作成. 明治大学心理社会学研究, **5**, 22-32.
- 坂柳恒夫(2016). 小・中学生の生き抜く力に関する研究—キャリアレジリエンス態度・能力尺度(CRACS)の信頼性と妥当性の検討— 愛知教育大学研究報告. 教育学科編, **65**, 85-97.
- 清水和秋(1989). 中学生の進路展望と進路不決断との関係. 進路指導研究, **10**, 1-7.
- 清水和秋(1990). 進路不決断尺度の構成—中学生について. 関西大学社会学部紀要, **22** (1), 63-81.
- 総務省統計局(2015). 労働力調査(基本集計)2015年10月分結果の概要. 2015年11月27日  
(<http://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/pdf/201510.pdf>) (2015年11月30日)
- 下村英雄(2008). 最近のキャリア発達理論の動向からみた「決める」について. キャリア教育研究, **26**, 31-44.
- Super, D. E.(1990). A life-span, life-space approach to career development. In D.Brown & L.Brook(Eds.), *Career choice and development: Applying contemporary theories to practice*. San Francisco: Jossey Bass.
- 富永美佐子(2008). 進路選択能力および進路選択自己効力が進路選択行動に与える影響—高校生・大学生の発達差の検討— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, **56**, 163-177.
- 富安浩樹(1997). 大学生における進路選択自己効力と時間的展望との関連. 教育心理学研究, **45**, 329-336.
- 中央教育審議会答申(2011). 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について. 2011年1月31日  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm)) (2016年9月27日)
- 浦上昌則(1983). 女子短期大学生の進路選択に対する自己効力と職業不決断—Taylor & Betz(1983)の追試的検討— 進路指導研究, **16**, 40-45.
- 渡辺三枝子(2009). 新版キャリアの心理学—キャリア支援への発達のアプローチ— ナカニシヤ出版